

非行少年の時間の連続性に対する認知について

—自己効力と結果期待の観点から—

河野 莊子

I：問題意識

本研究では、非行少年の時間の相互作用に対する認知の歪みを主題とする。研究1では、歪みの起きてくる要因として自己効力を取り上げ、その構築の仕方を検討する。研究2では、さらに、場面の違いによって未来に対する予測の程度が異なってくる原因について検討を加える。

II：研究1

1. 目的

河野(1992)の「非行少年は、自分にとって positive な結果となる場面(P場面)においては非常に高い割合で過去と同じようになると予測し、negative な結果となる場面(N場面)においては、過去と同じようにはならないと予測する傾向にある」との結果を、Bandura, A. (1977)の自己効力(self-efficacy)の理論から、検討しなおす。すなわち、非行少年と一般少年の間の全般的な自己効力の構築の仕方の相違として、この点が説明されるものと考えられる。

2. 方法

「自己効力を測る項目」による質問紙調査を行なう。調査対象は非行群184名(平均17.1歳)と一般群128名(平均15.6歳)である。非行群は現在鑑別所に収容されている男子少年、一般群は普通科高校の1年生男子である。質問紙は、非行群は各居室(5~6人程度)で、一般群は各クラスで実施された。非行群のフェイスシートには、知能指数を記入する際の必要性から氏名を本人に記入してもらった。知能指数は、非行群と一般群の間の知的水準の差を統制する目的で、一般群を平均IQ100と仮定し、非行群を操作した。

<1> 自己効力を測る項目について

パズルやクイズを解くことを通して、被験者に自分の力をどれだけ信用しているかを評定させる。質問紙は以下のようなものである。(以下、1~3までを前半、3~5までを後半とする)

- (1) 問題に導入する前に、「これからする問題をどれくらい解くことが出来ると思うか」を予測し、百分率で提示させる。
- (2) 非行群・一般群それぞれを、難易度の高い問題を解く群・低い問題を解く群の2つに分け、それぞれに3

問ずつ問題を解かせる。

- (3) 「これからの問題をどれくらい解くことが出来ると思うか」を予測させる。

- (4) さらに、3問題を解かせる。

- (5) 「どれくらい正解していると思うか」を予測させる。

3. 結果と考察

① P場面においては、非行少年・一般少年の間で、自己効力の差は見出せなかった。また、自己効力の推移については、非行少年は前半よりも後半に、自己効力を上げた者の割合が高くなる傾向にあった。また、後半に、一般少年は非行少年よりも大きく自己効力を上昇させていることが見出された。しかし、非行少年も一般少年も、前半と後半とで自己効力を上昇させる幅には差はなかった。以上のことから、一般少年は、「できる」という感覚を実感し続けることができた者が、自己効力を上昇させるが、非行少年は、そういった場面の持続に自分が関わっているという事実そのものが、自己効力を上昇させるということが推測された。

② N場面においては、前半で、非行少年は一般少年よりも、自己効力を上げる者の割合が高い傾向が示された。自己効力の推移については、非行少年は前半と後半に差は見出されなかったが、一般少年は後半に自己効力を上げる者が多いことが示された。また、一般少年は後半において自己効力を下降させる幅が大きくなるが、非行少年は反対に小さくなることも指摘された。以上のことから、非行少年は、場面からのストレスを強く感じるため、自己効力を上げることで仮にでも心理的な安定を得ようとしていると考えられた。

III：研究2

1. 目的

非行少年は、自分が過去・現在・未来の相互作用を認めていないことを、周囲との関係の中でどのようにとらえているのか検討する。

2. 方法

「結果期待を測る項目」による質問紙調査を行なう。加えて、非行群は「非行進度を測る項目」にも回答する。調査対象や実施状況・記入項目は研究1と同様であるが、研究2ではそれに加えて、非行の初発年齢(初めて警察に捕まった年齢)を記入する。

＜1＞ 結果期待を測る項目について

架空の物語を読ませ、主人公がこの後どうなるか推測させる。物語は、運動状況・対親しい年長者状況・対友達状況の3種類を想定し、主人公にとってのP場面とN場面とを2つずつ作成した。また、1つの物語について、主人公が自分自身である場合・親しい友人である場合・付き合いの浅い友人である場合の3条件が用意された。物語を読んだ後、物語の中で起こった出来事に対して、以前の経験と同じ結末になる可能性はどれくらいだと思うか、ならない可能性はどれくらいだと思うかを百分率で表示させる。

＜2＞ 非行進度を測る項目について

非行事実・非行頻度などを具体的に記した項目によって調査した。全8項目の非行事実の頻度を5段階評定で訊ね、得点化した。この得点と非行の初発年齢とをあわせて、非行進度を測定した。つまり、非行群184名の中で、非行の初発年齢が15歳以前で得点が高い者（最高点から40%）52名を「非行進度の進んでいる群」（以下EH群）、15歳以後で得点が低い者（最低点から40%）43名を「非行進度の進んでいない群」（以下LL群）とした。

3. 結果と考察

① P場面において、EH群の少年は、主語が親しい友人の場合と自分自身の場合に、LL群の少年は、親しい友人の場合に、楽観的な見通しを持つことが指摘された。一般少年は、主語が誰であっても、positiveな結果を期待する程度は変わらなかった。以上から、一般少年は、自分に対しても他者に対しても、多少のことでは揺らがないような一定した認知を保っていると言える。しかし、EH群の少年は、自分に対する認知が曖昧であるため、自分に関する判断を下す時にさえ周囲の影響を受けやすいと思われる。また、他者に対する概念も明確ではないため、自己と他者が、言わば渾然一体となってしまっている状態であると言えよう。LL群の少年は、自分に対する概念が、ある程度明確に出来ているため、自分自身を他者との位置付けの中で比較的客観的に見ることが出来ると思われた。

② N場面において、主語が自分自身である場合、非行少年は、非行進度に関係なく、一般少年よりも有意に明るく楽観的な見通しをもっていることが示された。主語が親しい友人である場合、EH群の少年は、適度に過去の経験を利用して状況判断していたが、LL群の少年は、過去の経験を重視し、非常に厳しい目で状況判断していた。主語が付き合いの浅い友人である場合は、3群とも差は出なかった。また、一般少年は、親しい友人・付き合いの浅い友人・自分自身の順で状況を楽観的に見ていた。以上から、一般少年は、自己を他者の中で正確に認知できているので、自分に対する判断が厳しいものとなると考えられた。それに対してEH群の少年は、自分と他人とが渾然一体としており、脅かされるという状況そのものに影響されてしまうため、過去の経験を否定し、明るい見通しを持つと思われた。一方、LL群の少年は、自分が脅かされる場面では、心理的な圧迫から逃れるために明るい見通しを持つが、主体が親しい友人となると、自分の時に明るい見通しを持っていた分バランスをとるかのように、非常に厳しく状況を判断すると考えられ、表裏の関係であることが指摘された。

IV：総合的考察

非行少年は、P場面では、場面が持続しているという事実によって自己効力を上昇させてしまう。そのように上昇した自己効力が行動に影響を与えるため、場面に対して、明るく楽観的な結果期待を持ってしまわないだろうか。反対にN場面では、彼らは、場面からのストレスへの対処法さえ見つかれば、そのストレスは弱まり、深刻なものではなくなる傾向にある。そして、そうした対処のなされた自己効力が行動に影響を及ぼすとともに、同じ方法を結果期待においても用いるため、過去の経験を否定し、楽観的な未来への見通しを持つことになるのではないだろうか。また、研究2から、親しい友人が行動を起こす時、それが自分にとって望ましくないと判断される場合は、加担することを拒否する能力を持っている少年の方が、非行進度が進んでいないと言えるだろう。